



## 立教大学教会音楽研究所ニューズレター 2024年/No. 32

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 Tel/Fax: 03-3985-2786 <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/icm/>

### 所長ごあいさつ

#### 立教大学教会音楽研究所設立 25 年

立教大学教会音楽研究所・所長  
立教大学異文化コミュニケーション学部教授  
星野宏美



立教大学教会音楽研究所は今年度、設立 25 年を迎えました。日頃から私たちの活動に関心を寄せ、さまざまな形で支えてくださっている皆様のおかげと感謝申し上げます。

昨秋刊行の紀要『RICM MUSICA SACRA 第9号』（2021/22/23年合併号）には、特集「25年間の歩み」が組まれています。所員7名の寄稿のほか、詳細な年譜も収めていますので、是非、ご一読ください。歴代所員リストの作成も試みましたが、各人の任期を正確に把握することは意外に難しく、今回は掲載を見送りました。大まかな全体を眺めても、四半世紀の間、実に多くの所員が関わったことに目を見張ります。

この数年間はとくに世代交代の時期でした。2022年度以降に退任された方々のお名前を挙げて、それぞれのお働きに感謝いたします。ジェームス・ドーソン先生（初代所長）、高橋輝暁先生（第2代所長）、青木瑞恵氏、イ・コニョン氏、上田亜樹子先生、加藤啓子氏、竹原創一先生、長い間、本当にありがとうございました。

2024年度には、新任所員をおふたりお迎えしました。佐藤望先生（国際基督教大学教養学部アーツサイエンス学科教授）は、バロック教会音楽の研究と実践の両面で活躍されています。森裕子先生（上智大学神学部神学科教授）は、グレゴリオ

聖歌や中世音楽理論の手堅い研究で知られ、立教大学辻荘一・三浦アンナ記念学術奨励金受賞者でもあられます。

事務体制も一新しました。2022年度から遠藤陽平氏に、2023年度からは石井祐三子氏にも加わっていただき、2人体制で運営しています。

先回のニューズレターに記したように、2022年度秋学期より私が所長代理を務めていましたが、2024年度に正式に所長を拝命いたしました。第3代所長のスコット・ショウ先生は、定年後も特別専任教授として大学に残られ、もうしばらく聖歌隊の指導と教会音楽の統率、そして教会音楽研究所の副所長を続けてくださいます。

立教大学を取り巻く環境は、この四半世紀で大きく変化しました。少子化が叫ばれるなか、学生数は倍増しました。キャンパスの高層化が進んでも、教室逼迫は解消しません。若者の熱量とエアコン稼働が温暖化に拍車をかけます。高齢化の影響で、社会人教育が増強されていますが、最近のキャンパスで目立つのは多様な留学生。グローバル化は、感染症やエネルギー問題をものともせず、破竹の勢いです。デジタル化の波も凄まじく、ついこのあいだ紙コピーがパワーポイントに取って代わるのに目を白黒していたのが、今や大学の催しはオンライン配信と切っても切り離せないものとなりました。

教会音楽研究所のニューズレターも今号からPDF化することとなりました。ウェブサイトやSNSでの発信にも今後、力を入れていきます。とはいえ、音楽や霊性をテーマとする私たちの研究所では、リアルな出会いを引き続き大切にしたいと考えています。学びと交わりの時をご一緒にまいりましょう。

### 目次

定例コラム 1 聖歌隊長便り.....	2
定例コラム 2 チャブレン便り.....	3
定例コラム 3 オルガン便り.....	4
研究所活動報告.....	5
研究所活動報告/予定.....	6

Scott Shaw



## 2024年度の諸聖徒礼拝堂聖歌隊活動報告

立教大学諸聖徒礼拝堂聖歌隊長  
スコット・ショウ

2020年から2022年にかけてのパンデミックは、世界中の聖歌隊にとって非常に困難な時期でした。歌うことが危険な活動と見なされる中、多くのグループが練習や公演を中止し、メンバーを失いました。立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊も例外ではなく、2020年の春学期には活動を完全に停止し、秋には限定的に歌唱を再開しました。この間、新しいメンバーの募集がほとんど不可能となり、聖歌隊の人数は2019年の約60人（聖歌隊創設100周年の年）から、最悪の時期には十数人にまで減少しました。

しかし、多大な努力による新しいメンバーの勧誘と訓練を経て、現在では45名のしっかりとしたグループへと回復しました。聖歌隊は男性と女性のバランスが良く、私の考えでは、音楽の質もコロナ前のレベルに達していると思います。この復興を非常に嬉しく思い、困難な時期にも献身的に活動を続けたメンバーを心から称賛します。他の大学チャペルの聖歌隊が同様の復興を遂げられなかった話を耳にするたび、私たちは幸運であったと感じます。

2024年は立教学院創立150周年にあたる記念の年であり、これに関連した礼拝や式典が数多く執り行われました。聖歌隊もそれらで奉唱しました。特に春学期のハイライトとなったのは「150周年記念礼拝と式典」でした。聖歌隊と多くのOB・OGが2カ月にわたり特別な曲目の練習を行い、プロのプラスアンサンブルとオルガンの伴奏でアンセムや聖歌を奉唱しました。この記念すべき年に音楽を通じて関わったことは非常に感動的であり、歴史的な出来事に携わったすべての人々にとって、長く心に残るものであったと確信して

います。

秋学期にはさらなる特別なプログラムが行われました。聖歌隊が健全な状態を取り戻したことを受け、2024年9月に関西ツアーを実施することが決定されました。このツアーは9日間で9つの公演を行う内容です。

ツアーでは主に日本聖公会関連の施設で歌いました（一カ所を除く）。訪れた場所には、大阪の川口基督教会、プール学院、神戸国際大学、神戸松蔭女子学院大学、神戸聖愛教会、そして神戸聖ミカエル教会が含まれます。ある会場ではコンサートを、他の会場では礼拝のために奉唱しました。2024年9月は例年がない暑さで、リハーサル、礼拝、公演が続くスケジュールは、通常の夏合宿以上に体力的な負担が大きいものでした。

それにもかかわらず、すべてのメンバーが文句を言うことなく、自分の役割を全うしてくれました。各地で熱烈的な歓迎を受け、私たちは感動と喜びを感じました。日本ではキリスト教の教会やチャペルで聖歌隊が活動することが他の地域ほど一般的ではなく、クラシック宗教音楽を生で聴きたいという強い渴望があることを改めて実感しました。

ツアーの準備を通じて、聖歌隊は音楽的にも大きく成長しました。また、普段あまり聖歌隊が聴かれる機会のない場所でその美しさを共有することを通じて、人間的にも成熟したと感じて

います。ツアーに参加した全員が、自分たちが与えた以上に多くのものを得たと確信しています。この実感は、聖歌隊が東京に戻り、秋の礼拝や式典、そして毎年恒例のレクイエム奉唱会の準備を開始する際にも大きな支えとなりました。

総じて、2024年度に聖歌隊に所属した学生たちは、生涯忘れることのない貴重な経験を積んだ一年を過ごしたと言えるでしょう。



## 時を刻む礼拝

一心からのささげもの

立教大学チャプレン  
齋藤 徹



Tetsu Saito

私は、祖父も父も聖公会の聖職として働き、また祖母の家系を遡れば5代目のクリスチャンにあたる家庭に生まれ育った。幼少の頃、父が立教高校・立教大学において10年ほどチャプレンとして働いていたので、私の幼少期の礼拝の記憶は、聖パウロ礼拝堂と諸聖徒礼拝堂の景色と共に蘇ってくる。特にイースター礼拝やクリスマス礼拝は、いつもより華美な式服を身に着けているたくさんの礼拝奉仕者が壇上に並び、香を焚いてささげられていた荘厳な礼拝がとても印象的だった。しかしひとたび礼拝が終われば、みな笑顔になって「おめでとう」とのあいさつを交わし合っていた。緊張感に溢れた礼拝と、その後に広がる笑顔に、私なりの教会生活を見出していた。

そのような教会や礼拝の記憶と共に浮かんでくるのが礼拝音楽だ。オルガニストの奏楽、司式者や会衆の歌声、指揮者のタクトに導かれる聖歌隊のハーモニーなど、礼拝の記憶には豊かな音楽が伴っている。

教役者として教会で奉職し始め、その記憶は徐々に塗り替えられていった。奏楽者が十分に在籍していない教会、聖歌隊どころか会衆が数名いるだけの教会、様々な教会で奉仕の機会をいただいていた。しかしそれは、荘厳さも、数的な豊かさも、音楽技術的な洗練もない礼拝なのではあるが、礼拝とは何か、奉仕とは何かを考えさせられ、かえって礼拝の豊かさを知らされる「記憶の塗り替え」となっていた。

ある小さな教会でのこと。主日礼拝に司式者である私と、奏楽者の信徒ひとり、二人だけの礼拝をささげる機会があった。礼拝の中で聖歌を歌っていた時に教会の電話が鳴り、奏楽者の信徒は奏楽をキリの良いところでやめて、電話の元へ行ってしまった。私は彼女が戻って来るまで待って、聖歌の続きを歌おうと思っていた。戻ってきた彼女は開口一番「司祭が賛美をやめてどうするのですか!」と不満そうに告げた。私が「あなたが戻ってきてから続きを歌おうかと思って待っていました」と言うと、彼女は「礼拝での聖歌は神さまにささげるものでしょう。私は司祭が、私の想いも込めて賛美し続けてくださると信じて電話に出たのです。もしかしたら教会にS.O.S.を求める電話かもしれませんから」と私を戒めた。少し反省しつつ「それで、電話はどなたからのものでしたか」と尋ねると、「安い電力プラン提案の営業電話でした」と彼女。礼拝中にもかかわらず二人で大笑いしてしまった。その後、二人でまた心を通わせながら聖歌の続きを賛美した。若き日の良き思い出だ。

礼拝をささげること、奉仕をすることについて、あの日の出来事、その日ささげた礼拝を、私は忘れることができない。誰にささげている奉仕なのか、説教なのか、聖歌や奏楽なのか、そして誰にささげている礼拝なのか。私が幼少の頃に触れていた荘厳な礼拝、洗練されたオルガニストの奏楽や聖歌隊の奉唱も、小さな

教会で数名の高齢者たちとゆっくりしたテンポで歌った聖歌も、奏楽者不在で大して音がとれていないままにアカペラで歌った賛美も、聖歌の途中から「鳴らなくなった」あの日のオルガンも、そのすべては神にささげられた私たちの心だった。

礼拝音楽について深い知識や見識を持っていない私だが、礼拝音楽は知れば知るほど美しい。歌詞に込められた想い、旋律にのせて現されている景色、そしてそれを誰がどのように、どのような場面で用いるかによって、まったく違った情景を創り出していく。また多様な楽器や奏法を用いることによって、彩りが添えられていく。そしてそれが私たちの心として神へのささげものになっていく。

ときに教会での礼拝やコンサートで、礼拝堂に静かに佇みながら聖歌や奏楽に涙を拭いている人の姿に出会う。また礼拝をささげることによって、笑顔になる人、喜びを湛えている人の姿に出会う。たくさんの重荷を背負い、息苦しさをおぼえているとき、その荷物を下ろしたり、息が整えられたりする。共同で祈りをささげ、共に賛美の歌声を響かせ、独りではないことを知る。その「時」が、静かに私たちの心を拓いていく。

豊かな礼拝とは、心からのささげものとして「時」を刻んでいる礼拝であり、その礼拝に伴う大切な要素が音楽である。礼拝音楽はひとつの祈りであり、心からのささげものであることが原点、そのことを私は大切にしていきたい。



Yuko Sakiyama



## 祈りと音楽

当研究所所員  
立教学院オルガニスト  
崎山裕子

2024年3月25日、聖グレゴリオの家宗教音楽研究所所長の橋本周子氏（1937-2024）が天に帰られた。バーゼル音楽院へオルガン留学する前の3年間、聖グレゴリオの家教会音楽科で過ごした時間は、母が結婚を機に所属した日本基督教団の教会に幼少時から通い、高校3年生のイースターに受洗し、リードオルガンで奏楽を始め、聖歌隊員、聖歌隊指揮をしていたプロテスタント色100%の脳を揺さ振り、キリスト教信仰のあり方と典礼音楽への向き合い方の基礎を築いてくれた。母教会、音楽大学は元より、スイスでも体験し得なかった稀有な学び、音楽だった。

橋本先生は、東京板橋の聖エリザベト教会で、ドイツのフルダから1954年に来日したフランシスコ会士ゲレオン・ゴールドマン神父（1916-2003）と出会う。武蔵野音楽大学声楽科卒業後、ドイツ・国立ケルン音楽大学で教会音楽を学び、帰国。祈り、研究、教育の三本の柱を中心に据え、ゲレオン神父と共に1979年に「宗教法人・聖グレゴリオの家宗教音楽研究所」を設立された。音楽の賜物を与えられている自分をどのような形で神に捧げるのか。ゲレオン神父という最強の理解者、分厚い盾が神によって備えられたとはいえ、その創設に至るまでどれほど祈られたことだろう。

「教会音楽の真の目的は神の栄光と賛美、信者の聖化にあり、その実践の前に永遠の神への礼拝—祈り—なくしてその真髄に達することはできない。日々止むことなく捧げられる礼拝からすべての活動が流れ出る」。聖グレゴリオの家の創設者であり当初の所長ゲレオン神父は、典礼を捧げることが最


も尊いという信念を固持し、私が在籍していた1990年から1993年は、典礼についての講義を担っておられた。ある日ミサで聖書朗読の時、その聖書箇所を開こうとページを繰っていたところ、「聖書は読むのではない、耳を傾けるものだ」と厳しく言われた。日本基督教団の教会では聖書朗読の時、その箇所に視線を落として全員が黙読する。説教を聞く時には聖書の余白に書き込みをする、それがキリスト者のあるべき姿という不文律があった。聖書に書かれたみ言葉は神からいただくメッセージ、それを魂で聞く、そう指摘され驚愕したことを鮮明に覚えている。「どんなに素晴らしく演奏できても、そこに信仰が無ければ神に対する礼拝にはならない」「賛美は人間にその能力を与えた神への返礼、宗教音楽の秘儀はここにある」。繰り返し聞かされたゲレオン神父の言葉は、今も魂に刻まれている。

翌年バーゼルを受験することが決まった1992年末、聖グレゴリオの家に宿泊しアーレントオルガンで練習する許可を得た。夜、施設内の施設確認を終えた橋本先生に呼ばれ、いろいろな話を伺った。聖グレゴリオの家を建設する土地を求めて不動産業者とあちこち回り、なかなか出会えなかった矢先、東久留米の林の奥へ案内された。その土地に立ち空気を吸った瞬間、橋本先生は「ここは神様が用意してくださった所だ」と直感したそう。契約する時に、そこは日本聖公会の男子修道院跡地だったと知らされた。


橋本先生のグレゴリオ聖歌の授業では、ネウマ譜の記号（virga, tractulus, clivis, pes, porrectus, etc）の名前と意味を理解するのに困難を極めた。

当時の修道士たちは革の楽譜が置かれた台を囲んで練習したようだが、多くの場合は毎日歌っているうちに微妙な揺れや延ばしを体感していく口承伝授だったのだろう。実際に歌ってみれば、記号が示すニュアンスを少しだけ感じることができた。ラテン語の単語が持つ祈りのエネルギーを音に還元するグレゴリオ聖歌の歌唱は、黒の四角い音符を等価で歌うことではない。母音を分離させて強調、微妙に引き延ばして強調、音程を自在に変える、最高音で立ち止まる。なぜ、そう歌うのか？祈りの言葉を音に置き換えるにあたり、その言葉をできうる限り神に捧げるにふさわしい最上の美とするために、である。橋本先生は、グレゴリオ聖歌は教会音楽の宝であり、優れた古典から学ぶことが音楽の理解を深める、とおっしゃっていた。実は、当時の私の貧しい頭ではグレゴリオ聖歌の力を受け止められなかった。30年以上オルガンを弾き、礼拝の奏楽をしてきてようやく、グレゴリオ聖歌が地上で最も美しい「祈り」の表現方法であることを肌で感じることができるようになった。人の声による音楽があらゆる楽器による表現を凌駕するのは、そこに祈りの言葉があるからだ。


とはいえ、歌詞の無いオルガンの楽曲にも作者が楽譜の中に書き記した祈りは存在する。オルガンを弾くという行為は、作曲者の無言の祈りを音に翻訳することだと、聖グレゴリオの家での月日を想うにつれ、反芻する日々だ。今、オルガニストであることが許されているのは奇跡であり、神の恵み。ならば、奏でるひとつの音が祈りとなり、音楽のなかに存在する三位一体の神と出会う、その時空を会衆と共有すること、これしか返礼の術は無い。

 **オルガン講座 聖歌と奏楽曲**  
—聖餐式のオルガン曲から学ぶ—


【講 師】 崎山裕子 (立教学院オルガニスト)  
【開催日時】 2023年5月6日 (土)~7月1日 (土)  
16:00~17:30 全3回

 **リードオルガン講座**  
聖歌と奏楽曲 —リードオルガンについて—

【講 師】 崎山裕子 (立教学院オルガニスト)  
【開催日時】 2023年5月13日 (土)~7月8日 (土)  
16:00~17:30 全3回

 **オルガン講座@新座チャペル**  
オルガン演奏法 —個人レッスン形式で—


【講 師】 佐藤雅枝  
(立教新座中学校・高等学校オルガニスト)  
【開催日時】 2023年7月13日 (木) 13:00~17:00  
【場 所】 立教学院聖パウロ礼拝堂 (新座キャンパス)

 **夏の教会音楽ワークショップ**


【テ ー マ】 ・ルターの「教理問答コラール」とバッハの「ク  
ラヴィーア・ユーングIII」の三位一体構造  
・キリスト教の礼拝と詩篇  
・リードオルガン奏者のための初級修理講座  
・リードオルガン講座  
・音楽黙想会

【講 師】 ウィルソン・アンドリュウ (ルーテル学院大学)  
松本義宣 (ルーテル東京教会)  
ロジャー・ラウザー (コミュニティーアーツ東京)  
スコット・ショウ (立教大学文学部キリスト  
教学科特別専任教授)  
伊藤信夫 (リードオルガン奏者、修復師)  
伊藤園子 (リードオルガン奏者、修復師)  
相田南穂子 (リードオルガン奏者、修復師)  
崎山裕子 (立教学院オルガニスト)  
上田亜樹子 (日本聖公会月島聖公会牧師)


【開催日時】 2023年8月12日 (土)、9月2日 (土)  
【場 所】 立教学院諸聖徒礼拝堂 (池袋キャンパス)  
等で収録、日本基督教団信州教会等で対  
面開催

 **オルガン講座 聖歌と奏楽曲**  
—聖餐式のオルガン曲から学ぶ—


【講 師】 崎山裕子 (立教学院オルガニスト)  
【開催日時】 2023年10月7日 (土)~2024年1月  
6日 (土) 16:00~17:30 全4回

 **リードオルガン修理講座**  
聖歌と奏楽曲 —リードオルガンについて—

【講 師】 崎山裕子 (立教学院オルガニスト)  
【開催日時】 2023年10月14日 (土)~2024年1月  
13日 (土) 16:00~17:30 全4回

 **オルガン講座@新座チャペル**  
オルガン演奏法 —個人レッスン形式で—

【講 師】 佐藤雅枝  
(立教新座中学校・高等学校オルガニスト)  
【開催日時】 2024年2月15日 (木) 13:00~17:00  
【場 所】 立教学院聖パウロ礼拝堂 (新座キャンパス)

 **レクチャーコンサート**  
ドイツロマン派の宗教音楽

【講 師】 大島 博 (立教大学兼任講師)  
【開催日時】 2024年3月3日 (日) 18:00~19:30  
【場 所】 立教学院諸聖徒礼拝堂 (池袋キャンパス)



## 詩編の歴史と歌い方

- 【講師】スコット・ショウ（立教大学文学部キリスト  
教学科特別専任教授、教会音楽研究所副所長）  
広田勝一（立教学院・大学チャプレン長）  
中川英樹（立教大学チャプレン）  
遠藤陽平（立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊長補佐）
- 【開催日時】2024年6月15日（土）14:00～16:30
- 【場所】マグノリア・ルーム  
（池袋キャンパス・チャペル会館2階）



## リードオルガン講座 聖歌と奏楽曲 —多様なスタイルを学ぶ—

- 【講師】崎山裕子（立教学院オルガニスト）
- 【開催日時】2024年9月28日（土）～2025年1月25  
日（土）全6回
- 【場所】マグノリア・ルーム  
（池袋キャンパス・チャペル会館2階）



## オルガン講座 聖歌と奏楽曲 —多様なスタイルを学ぶ—

- 【講師】崎山裕子（立教学院オルガニスト）
- 【開催日時】2024年9月21日（土）～2025年1月18  
日（土）全6回
- 【場所】マグノリア・ルーム  
（池袋キャンパス・チャペル会館2階）



## リードオルガン特別講座 ハルモニウムの楽曲をリードオルガンで弾く —セザール・フランクとカルク＝エーレルトの作品から—

- 【講師】Marc Fitze（ベルン聖霊教会オルガニスト）
- 【開催日時】2025年1月11日（土）16:30～18:00
- 【場所】マグノリア・ルーム  
（池袋キャンパス・チャペル会館2階）



## オルガン講座@新座チャペル オルガン演奏法 一個人レッスン形式で—

- 【講師】佐藤雅枝  
（立教新座中学校・高等学校オルガニスト）
- 【開催日時】2025年2月13日（木）13:00～17:00  
全4回
- 【場所】立教学院聖パウロ礼拝堂（新座キャンパス）



## 立教学院創立150周年記念企画公開シンポジウム 文化としての大学メサイア

—現在・過去・未来—

- 【講師】星野宏美（立教大学異文化コミュニケーション  
学部異文化コミュニケーション学科教授、  
教会音楽研究所所長）  
仲辻真帆（東京藝術大学大学兼任講師）  
大角欣矢（東京藝術大学教授）  
津上智実（神戸女学院大学名誉教授）  
筒井はる香（同志社女子大学准教授）  
宮澤淳一（青山学院大学教授）
- 【開催日時】2024年12月7日（土）14:00～17:00
- 【場所】立教学院諸聖徒礼拝堂（池袋キャンパス）



## 公開講演会 Laudate Dominum

賛美と靈性の源流をたずねて シリーズ第1回

- 【講師】阿部善彦（立教大学文学部キリスト教学科  
教授）  
坂田奈々絵（清泉女子大学准教授）  
袴田玲（岡山大学講師）  
宮本久雄（東京純心大学教授）
- 【開催日時】2025年2月18日（火）14:00～16:30
- 【場所】立教大学池袋キャンパス11号館・A203教室

ニューズレター No.32 2025年2月10日発行  
発行者：立教大学教会音楽研究所  
編集長：阿部善彦  
E-mail : music@rikkyo.ac.jp